Report
［査読無し］ 報 告

現代ファシズムとジェンダー
—人種化される女性身体の表象—

Contemporary fascism and gender
—Representations of the racialized female body—

内藤 千珠子
大妻女子大学文学部

Chizuko Naito
Faculty of Humanities, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：ジェンダー，ナショナリズム，ファシズム
Key words：Gender, Nationalism, Fascism

抄録

帝国的性暴力と「人種」をめぐる身体表象の関係という主題から，現代的ファシズムの論理について問題提起する．現代的なファシズムの論理がミソジニーとレイシズムに支えられた構造をとることをフェミニズムの観点から概観した上で，具体的な小説テクストとして，村田沙耶香「世界99」（2025）と武田泰淳「森と湖のまつり」（1958）を例に，身体表象に現れるレイシズムとミソジニーの交錯について論じていく．架空性の高い記号を設定し，フィクションを通してファシズムの暴力構造を可視化するありようや，登場人物の身体を描写する具体性のなかに差別のシステムを象徴化させる小説の方法を検討し，今後の課題を示した．

1．ファシズムの論理と標的にされる女性身体

現代の言説状況において，ヘイトの情動が負の中心を構成していることは言を俟たないだろう．ナショナリズムを背景とした憎悪言説の論理の中核あるのは，ミソジニー（女性嫌悪）とレイシズム（人種差別）である．その背景に広がる構図として，現代ファシズムの論理を検証する必要がある．なぜなら，ファシズムの論理を支える両軸はミソジニーとレイシズムであり，その意味で憎悪言説の論理とファシズムは連続しているからである．

現代の世界におけるファシズムの現れをフェミニズムの視点から考察したシャン・ノリス『反中絶の極右たち』は，白人至上主義を唱える極右ファシストの主張「グレート・リプレイスメント（人種大交替）」を分析しつつ，ミソジニーと交差するレイシズムの物語について論じている．ファシストのいう「グレート・リプレイスメント」は現実を歪めた「陰謀論」の形式を取るが，その主旨は，移民による人種的マジョリティの交替が，白人女性による中絶する権利の行使によって促進されており，フェミニストの「陰謀」によって白人種のジェノサイドが行われようとしているというものだ．

彼らのいうジェノサイドが起きるのは，フェミニストが中絶で出生率を抑制しているからだと信奉者は主張する．最も極端な常套句では，人種交替は社会を「非キリスト教化」する悪魔の謀略だと了解されている．それをフェミニスト，イスラム教徒移民，ユダヤ人エリートらが助長しているというのだ．

彼らは，白人至上主義にとっての自然の秩序を復活するために，女性の再生産労働を徹底的に利用して女性を「国家の子宮」に位置づける一方，黒人とグローバル・マジョリティを相手に人種間戦争を遂行して世界各地に人種的に純粋な民族の国家を創り，グローバルノースを白人の占有とするという．

すなわち，現代のファシズムの論理は，女性のリプロダクティヴ・ライツ／ヘルスへの攻撃と，移民への攻撃とが結合した様式をもち，現実をデフォルメしたフィクションを仮構した上で，標的となる敵に対し，攻撃的な言語を用いて非難するのである[1].

また，ポール・メイソンは，ファシズムが「暴力を振るう」という行為と協働しながら物語を創出するといったメカニズムのもと，幻想的な神話を，空想ではなく実現可能な物語として語り，言説のなかに派生させていく力学をもっていることを論じている[2]．物語として創出されるファシズムの神話は，ミソジニーを可視的な中心としているため，女性身体や女性のセクシュアリティこそが，ファシズムの言説の戦場と化していくというわけだ．ファシストの幻想的な神話において，回復されるべき「自然の秩序」とは，女性が「国家の子宮」と目される世界像であり，そこにあるのは家父長的な価値観に支えられた「秩序」である．これを損なう象徴的な現象が，女性の「自由」であり，リプロダクティヴ・ライツの思想だ，ということになる．

こうした観点を念頭におけば，憎悪言説の論理がファシズムの論理と構造的に同一の型を備えていることは明らかであり，両者の協働性を考察することは不可欠であろう．加えて，文学の言語において描き出されてきた人種や女性身体の表象を検討する際には，それが現代のファシズムがもつ論理とどのように節合しているのかに注意を払わなければならない．

すでに学術的な議論を通じて合意されてきたように，「人種」には生物学的な実態がなく，「人種」の概念それ自体が人種差別のフレームを内包するかたちで形成されてきたわけだが，現在でも社会システムが人種主義を支え続ける状況があり，「システミック・レイシズム（構造的人種主義）」の観点から批判的な問いかけが組み立てられてきた[3]．一方で，文学的な言語は，あたかも実態があるかのように，身体を人種のイメージによって表象し，構築してきたといわなければならない．この問題について批判的に振り返りつつ，新たな視座を模索することは，文学研究における重要な課題であるといえるだろう．

本稿では，文学的言語におけるレイシズムとジェンダーの関係を，女性身体と「人種」のイメージを付与された身体が接続する地点を考察することによって素描することを試みたい．本稿の記述は，人種をめぐる身体表象と帝国的性暴力について，フェミニズム批評の再検証することを目的としたもので，ジェンダーの観点から，暴力の現在形を批評的に可視化し，それとは異なるフレームを創出することを目指そうとするひとつの過程である．

２．村田沙耶香の描く架空世界

ファシズムの暴力におけるレイシズムとセクシズムの結合をみた場合，現代日本にあっては，それはカリスマ的な中心が明示される構造はとらず，同調圧力によって一元化された権威的規範に服従することを強いる様式やポピュリズムの様式を経由するかたちで現れているといえるだろう．こうした様式を，フィクションを通して可視化したのが，村田沙耶香の最新作『世界 99』（上下巻，集英社，2025）である[4].

物語に設定された語り手「私」（空子）は，自分の関わる世界の基準を即座にキャッチし，相手の規範に呼応して，自分を出現させるという特徴をもつ．自らの意志や欲望，アイデンティティといったものは存在せず，データを組み合わせて現れる「私」は，そのときどきで複数のキャラクターに成り代わる．「私」にとって重要なのは，危険を回避して生き延びることであり，自分を生存させるために最適な「媚びる」方法を選択しようとする．換言するなら，「私」は，よりよい従属を選択することに賭ける記号的存在にほかならない．

物語展開としては，語り手の幼少期から老年期までの一生が描かれる形式をとるが，テクストの構造として，語り手の外的世界のスタンダードは大きく三段階に変化する．幼少期から若い女性として過ごす時期，中年期，さらに別の存在と化す段階と，三つの次元が設定された上で，「私」の複数のキャラクターと，複数の環境世界，そしてそれらを相対化するレベルにある「世界 99」という指標が示されていく．

テクスト内に創出された記号として注目されるのが，「ピョコルン」と「ラロロリン人」である．架空性の高い記号がもつ象徴的な効果について，確認しておこう．

「ピョコルン」は，はじめ「強制的に可愛い生き物」として登場し，「私」も父親から買い与えられることになるが，高価な愛玩動物として流通する商品である．だが，時代が進行するにつれ，女性の

代わりに性的対象化される存在へと変化し，さらには，家庭内で女性役割の「代理」をする，性奴隷的な存在へと置き換えられていく．のちには，少女たちが憧れる両義的な存在ともなり，また，「リサイクル」の手続きを経れば，人間が「ピョコルン」になることが可能にもなり，すなわち，道具化の欲望を具現した位置にあるといえる．このように，「ピョコルン」は，セクシズムと女性身体をめぐる支配構造を可視化する役割を担った記号として配置されている．

また，「ラロロリン人」は「優秀なDNA」をもつとされる「人種」として認識される存在だったが，初期の段階では，「ふつう」の人々から権利や尊厳を奪う存在として，憎悪と排除が徐々に広がり，差別の対象とされていく過程が描かれている．状況が変化すると，ピョコルンを開発したのはラロロリン人であったことが明らかにされ，さらには一般的な人々を救う「恵まれた人」たちとして社会的に許容されるようになる.「ラロロリン人」は，いずれはピョコルンへとリサイクルされる特異な身体として，有標化された両義的な位置を生きる存在へと変質させられていく．

架空性をもった二つの記号が，それぞれセクシズムとレイシズムを象徴する役割をもち，さらに，その両者が深く関わり合っているという物語上の設定は，現実世界においてもセクシズムとレイシズムが密接な関係性をもつことを明白に伝える役割をもっているといえるだろう．

「ピョコルン」と「ラロロリン人」は，小説のなかに，現実世界のファシズムの様式を引用するために，フィクションとして設定されたと言い換えることもできる．小説のなかには，被傷性と憎悪の暴力に覆われたファシズムの構造が，「私」の経験を通して描き出されていくからである．

「私」が観察し，吸収していくのは，傷つきやすさを根拠として，憎悪を排除のメッセージに同調していく人々の姿である.「私」は危険から身を守り，自分を生き延びさせていくために，その環境世界からの呼びかけ，そして目の前にいる相手からの呼びかけに即応しようとする．そこにあるメッセージとは，抵抗するのではなく，従属することによって，限定された権利を排除される他者に対して行使した方が安全である，というファシズム的な呼びかけである．

その呼びかけに応じる「私」は，服従することの有効性を経験する．しかしながら，自らが権力をもつ誰かから欲望や暴力の対象として発見されてしまうと，服従はときに，圧倒的に無力であるほかない．無抵抗でいることの危うさを，「私」は反復的に経験させられる．

『世界99』は，最終的に，怒りの感情を「汚い感情」として忌避する世界に同調し，無抵抗であることを選択し，リサイクルに身を投じて奴隷化する身体を生きることになる「私」を描き抜くのだが，このような「私」と関わる登場人物として，徹底して抵抗するという位置，「私」以上に見事に順応する位置を示す記号が配置され，女性差別と人種差別に基づくファシズムとポピュリズムの複合が見事に描出されていく．設定された登場人物の間に生じた葛藤や親和の延長で，「私」の選ぶ最適化した女性身体は，読者に鋭い問いを突きつけるだろう．

３．人種化される女性身体と「アイヌ」の記号

架空の記号を際立たせた『世界99』を出発点として，さらに，「人種」と「女性」の身体を具体的に現出させる小説の言語と交差させて論じることで，現代ファシズムとジェンダーの関係について思考するための学術的フレームを創出することにつなげたいという見通しをもっている．

比較するための素材の一つとして念頭にあるのが，武田泰淳「森と湖のまつり」(1958) である[5]．日本的なファシズムの現在形を考える上では，近現代の日本の文学的表象や物語がどのように関わっているのか検討する必要があり，とくに人種をめぐる主題については，帝国日本が先住民の「アイヌ」を物語としてどのように表現してきたのかという批判的な観点を念頭におかなければならないだろう．

「森と湖のまつり」に，作家としての武田泰淳の「人生観，世界観の根底をなすもの」が描かれているとみる作家論的な位置づけや[6],「作者の意図は，アイヌを描くというそのことではなくて，アイヌをもつて日本人の正体をあばく鏡とするという点にあつた」とする作品論的な評価とは別に[7],この小説が発表当時から「現代」におけるアイヌの主題を描いた作品として受容された経緯から，「文化論的な観点から読んでいけば，この作品でのアイヌ問題の描かれ方を積極的に評価することも可能」とする議論や[8],「作品の主要な問題」と

しての「民族意識」が「現代社会の民族問題とどのように直結しているか」という観点からの考察もある[9]．触発的な論点としては，アイヌをめぐる「民族」の問題の描かれ方とテクストに盛り込まれた「思想や批評」を考察した水溜真由美による議論があり，水溜は「森と湖のまつり」に，民族主義批判を含みもった「オルタナティヴな民族主義の可能性」を見いだしている[10]．今後，これらの先行研究も参照しながら，人種の表象に注目して主題化していきたいと考えている．

なお，「森と湖のまつり」は，作品の連載当時から映画化の企画が進行し，内田叶夢監督によって映画化されたことでも知られている．木田隆文は，小説テクストと映画テクストとの相関関係にも着意しつつ，小説が「観光小説」のフレームで受容された状況について考察している．木田は，小説にある観光的消費を批判する小説の批評性を析出し，むしろ「反観光」と呼ばれるべきテクストの論理が，映画テクストを彩る，北海道の風土を背景にした「恋愛」物語という装置によって，観光という消費を誘発する力学に巻き込まれていった様相を明らかにしている[11]．また，鳥羽耕史は，同じく映画テクストと小説テクストの比較という観点から出発した論考において，人種のイメージを身体のレベルで描写する際の暴力の構造について，「和人とアイヌとの著しい非対称性が書き込まれている」ことを分析している[12]．

こうした議論を念頭におき，恋愛という装置のなかにおかれた身体表象といった観点からみたとき，作中で中心化されるヒロインの「恋愛」物語に，媒介的に関わりをもつアイヌの女性，鶴子を手がかりとして検証することができそうだ．この長篇小説において，視点人物であり，物語のヒロインともなるのは，アイヌの風俗を描くために北海道を移動する佐伯雪子であり，雪子と，「抵抗するアイヌ」を代表するようにみえるカリスマ性をもったヒーロー，風森一太郎とが重要な対関係を結び，恋愛という物語装置における重力となっていく．この雪子と「アイヌの女神」「問題の女性」と呼ばれる鶴子は，テクスト上で，比較の対象として対構造化されている．二人の女性は，男性たちの目線によって「似てますよ．そりゃ純粋のアイヌと純粋のシャモなんだから，似てると言ったってちがうさ．だけど似てるんだ」と意味づけられ，絶えず比較のまなざしにさらされ，関係づけられるのだ．着目したいのは，鶴子の「美しい」身体の成形についてである．鶴子という登場人物にアイヌの「美しさ」を代表させる際の力学や，テクストにおける人種の表象や女性身体の描写については，稿を改めて詳述したい．

本報告では，身体表象に現れるレイシズムとミソジニーの交錯を検討するために，二つの小説テクストを参照しつつ，問題提起を試みた．テクスト上に形成された，人種化される女性身体を枠づける物語の論理を可視化した上で，それがどのように現代の暴力の規範のなかで反復的に引用されているのか見極めたい．

引用文献

[1]シャン・ノリス『反中絶の極右たち　なぜ女性の自由に恐怖するのか』牟礼晶子訳，明石書店，2024，p.18-19，p.47-48.
[2]Paul Mason, *How to Stop Fascism,* Allen Lane, 2021, p.18-19.
[3]竹沢泰子『アメリカの人種主義』名古屋大学出版会，2023，p.1-28.
[4] 村田沙耶香『世界 99』上下巻，集英社，2025.
[5]武田泰淳「森と湖のまつり」の書誌情報は以下の通り．初出『世界』(1955.8-1958.5)，初版新潮社（1958)，『武田泰淳全集』七巻（1972)，講談社文芸文庫（1995)．以下，テクストからの引用は講談社文芸文庫版に拠った．
[6]兵藤正之助「続武田泰淳論（一）　その死および「森と湖のまつり」をめぐって」『文学』岩波書店，1977，45(4)，p.466-484.
[7]亀井秀雄「作品論　武田泰淳『森と湖のまつり』」『国文学　解釈と鑑賞』至文堂, 1970, 35(10), p.93-98.
[8]清原万里「『森と湖のまつり』論　アイヌ問題をめぐって」『山口女子大学文学部紀要』1993，3，p.54-67.
[9]土佐圭司「研究ノート　武田泰淳『森と湖のまつり』における民族意識」『城西国際大学日本研究センター紀要』2008，3，p.81-87.
[10]水溜真由美「アイヌ民族における同化と民族主義　武田泰淳『森と湖のまつり』」広岡守穂編『社会のなかの文学』中央大学出版部, 2021, p.209-239.
[11]木田隆文「武田泰淳「森と湖のまつり」の言説圏　〈観光〉小説を視座として」『國文學論叢』2004，49，p.78-93.

[12]鳥羽耕史「劇映画におけるアイヌ表象　内田叶夢『森と湖のまつり』（1958 年）と成瀬巳喜男『コタンの口笛』（1959 年）を中心に」『思想』岩波書店，2022，1184，p.109-131.

付記
本論は，令和 6 年度大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号　N2411）における成果の一部の報告である．

（受付日：2025 年 6 月 19 日，受理日：2025 年 7 月 14 日）

内藤　千珠子（ないとう　ちずこ）
現職：大妻女子大学文学部教授

プロフィール：
東京大学総合文化研究科博士課程修了．
専門は近現代の日本語文学，ジェンダー研究．
所属学会は，日本近代文学会・日本文学協会など．

主な著書，論文：
内藤千珠子『帝国と暗殺』新曜社，2005.
内藤千珠子『小説の恋愛感触』みすず書房，2010.
内藤千珠子『愛国的無関心』新曜社，2015.
内藤千珠子『「アイドルの国」の性暴力』新曜社，2021，増補版，2024.
内藤千珠子「ヒロインとしてのアイヌ――「ゴールデンカムイ」における傷の暴力」『思想』岩波書店，1184 号，2022，p91-108.
内藤千珠子「恥を掻いてでも伝えたい――桐野夏生『オパールの炎』をめぐって」『現代思想』青土社，52（18），2024，p190-201.